

その 15

「千葉」は

「万葉」なり



知波乃奴乃 古乃豆加之波能 保々麻例等 阿夜尔加奈之美 於枳豆他加枳奴

「千葉(ちば)の野(ぬ)の 兎手柏(このてかしは)の 含(ほほ)まれど あやに愛(かな)しみ 置きて誰(た)が来ぬ」

(千葉の野の、兎手柏の花のつぼみのように、初々しくてかわいいけれど、とてもいとおしいので、何もせずに遠くこまでやってきました) 右一首、千葉郡大田部足人(巻 20・4387)

歌に詠まれている通り、いかにも愛おしくて優しい、とてもいい歌だ。下総国の防人の歌だが、その作者名のところを見ると、「千葉郡(ちばのこほり)」とある。千葉郡は今の千葉市のあたりになるが、「ちば」という地名はこの時代からすでにあったのだ。ところが、歌の冒頭の「ちば」は「知波」と万葉仮名で書かれているのはなんとも奇妙だ。万葉集には他にも「千葉破」で始まる歌があるが、さて何と読むか？……答えは、「ちはやぶる」、または「ちはやふる」。歌はこの後、「神の斎垣(いがき)も越えぬべし」と続くが、この「ちはやぶる」は神の枕詞である。「ちはやふる」は、アニメや映画でヒットし話題になった少女漫画のタイトルにもなっている。

他に、万葉集中、「千葉」という文言を使った例がある。それは、額田王の有名な歌で、歌中ではなく、その題詞に出てくる。額田王が天智天皇から「春山の花の艶と、秋山の紅葉の色、いずれが良いか競わせよ」と詔された時、額田王が歌をもって答えた歌(巻 1・16)の題詞である。原文では、「競春山万花之艶秋山千葉之彩」。「春山万花(ばんか)」、「秋山千葉(せんよう)」……美しい響きを持つ言葉である。この詔に対して、額田王は「春山の万花より、秋山の千葉こそ素晴らしい」と応え、「千葉」を選ぶ。

千葉の地名の由来は、諸説あるが、「多くの葉が茂る豊かな地」で、とても縁起がいい、とされている。つまり、古から実り豊かな豊穡の地、気候温暖で住みやすい国として、当時他国に比して人口も多かった。

平安京を開いた第 50 代天皇の桓武天皇には、安殿(あて)親王(第 51 代平城天皇)の他、第 52 代嵯峨天皇、第 53 代淳和天皇となった親王やその他にも葛原(かずらわら)親王など親王がいた。

そして、その葛原親王の子高望（たかもち）王、後の平（たいら）高望の子孫が上総介（かずさのすけ）として房総に渡り、千葉氏を興すことになる。千葉氏は、桓武平氏の名を捨て、なぜ千葉氏の名前にしたのだろう。『古事記』中巻と『日本書紀』第10巻に、応神天皇の同じ「千葉」の歌がある。

「千葉(ちば)の 葛野(かずの)を見れば 百千(ももち)足る 家庭(やには)も見ゆ 国の秀(ほ)も見ゆ」
(葉がたくさん繁る葛(かづら)の名に因む、葛野を見渡すと、豊かに満ち足りた民の家々が見えるよ。山々に囲まれた、住みよい平原の土地が見えるよ)

この歌の舞台、葛野は、現在は京都府宇治市の西に位置するが、桓武平氏が現在の千葉の地に移り住んだ時、祖父にあたる葛原親王の名にも通ずることから、「葛野」の枕詞である「千葉」をその家名にしたのでは、という説がある。そして、平安時代後期の大治元（1126）年、千葉常重は現在の千葉市中央区亥鼻（いのはな）付近に本拠を移し、武士団を形成。これが、千葉の都市としての始まりとされ、2026年には、開府900周年という節目の年を迎えることになる。

千葉常重の子、千葉常胤は千葉氏を豪族から御家人の地位まで登らしめた千葉家中興の祖といわれる。この千葉常胤の時代に千葉氏の記録として、「千葉集」という古文書がある。それによると、千葉に本拠を移した時の千葉の町の様子が次のように記録されている。

「大治元年丙午六月朔、始めて千葉を立つ（町の事なるべし）凡そ一萬六千軒なり、表八千軒裏八千軒、小路表裏。五百八十餘、曾場鷹大明神より御達報稲荷の宮の御前まで七里の間御宿なり（六丁一里なるべし）」などとして、その当時の千葉の街の繁盛の様子が引用されている。

「千葉集」そのものについては定かではないが、千葉氏の記録ということだから、「ちばしゅう」と呼ばれていたものと思われるが、その「千葉集」からおよそ900年後に、やはり千葉家当主が、新たに「千葉集」を作ることになる。今度は、「ちばしゅう」ではなく、「せんようしゅう」である。万葉集に倣った命名だが、その話の前に、本筋の「万葉集」に一度戻って話を進めることにしよう。

実は、その「万葉集」、その名が知られているわりには、いまだに分からないことが多い。万葉集には、その後で作られた勅撰和歌集などには付いている序がないため、そもそも万葉集という名の由来さえはっきりしていない。「万葉集」の「葉」の意味については、「千葉」と同じ「木の葉」説の他、「言の葉」説、「万の世」説、「紙」説等、これまでにいくつか説があった。平安時代以降に、「金葉集」や「玉葉集」、「新葉集」など、万葉集の名に倣った勅撰和歌集が編纂されたことから、「木の葉」説や「言の葉」説が有力だった。特に、平安時代の「古今和歌集」の仮名序の冒頭に「やまとうたは人の心をたねとしてよろづのことはとぞなれりける」とあるのを引いて、これまで「言の葉」説が最も有力として支持された時期もあった。しかし、現在は、「万の世」説、つまり「万世に未長く語り継ぐ歌集」という説が最も有力とされている。中国の『詩経』に「葉世也」（葉は世なり）と注記されているのがその有力な根拠となっている。今でも時代を表す時、「中葉」とか「末葉」とかは

使っているが、「葉」を「よう」と読み、「よ（世）」と読み解くというわけである。

しかし、そもそも 20 巻もの万葉集の中に、「万葉」という言葉が出てこないのである。「万葉集」のみならず、同時期の史書「古事記」や「日本書紀」等、その他の奈良時代の文献にも「万葉」という言葉の使用例はないという。

そこで、「万葉」がないなら、それに類する言葉の使用例を探してみることにした。その言葉が「千葉（せんよう）」だった。「万葉」が「万の世」だとしたら、「千葉」も「千の葉」ではなく、「千の世」の意味で使われている例があるのではなかろうか、というねらいである。そして、ねらい通り、あった！それも、「万葉集」に極めて縁が深い人物との関連で使われていたのである。『続日本紀』をひも解くと、天平 8（736）年 11 月の項だ。

「臣葛城等、願、賜橘宿禰之姓、戴先帝之厚命、流橘氏之殊名、**万歳無窮、千葉相伝**」
（臣葛城ら、願はくは、橘宿禰の姓を賜はり、先帝の厚名を戴き、橘氏の殊名（しゅめい）を流（つた）へて、万歳（ばんせい）に窮（きはま）り無く、千葉（せんえふ）に相伝へむ）

聖武天皇の時代、皇族の一人だった葛城王が臣籍降下して、母・橘三千代の氏姓である橘宿禰姓を継ぐことを願い許可され、以後は橘諸兄と名乗ることになった時の記述である。橘諸兄はその後正一位左大臣まで上り詰め、家持はその庇護のもと役目を務めたとされている。奇しくもその諸兄の記述のところに「**万歳無窮、千葉相伝**」として使われていたのだ。この「**千葉**」はまさに「千世（ちよ）」であり、「千代（ちよ）」なのである。もし、その前に「万歳無窮」と「万」が使われてなかったとしたら、「万葉相伝」と使われていたのかもしれない。つまり、橘諸兄の手の内に、「万葉」という言葉の可能性が残されたのである。

そして、この橘諸兄が、大伴家持とともに「万葉集」の編纂者だったのではという説がある。諸兄説が有力なのは、「栄花物語」の月の宴の巻に、「むかし高野の女帝の御代、天平勝宝五年には左大臣橘卿諸兄諸卿大夫等集りて万葉集をえらび給ふ」との記述があるからである。もし、万葉集の編纂に橘諸兄が関わっていたとしたら、「万歳無窮、千葉相伝」という「続日本紀」の記述から、「万葉」という言葉を新たに作り、歌集の編纂に当たって「万葉集」という名を命名したのかも、という推測もあながちあり得ないことではない。逆に、橘諸兄の命名となれば、「千葉集（せんようしゅう）」と名付けられる可能性がなかったわけでもない、と想像は広がるのである。

そして、世の中同じことを考える人はいるものである。過去の歴史を遡ってみると、「千葉集（せんようしゅう）」というネーミングを考えた人は、他にもいた。江戸中期の椎本（しいがもと）才麿という松尾芭蕉とも親しくしていた俳人が、「千葉集」という俳諧集を編纂している。また、芭蕉で言うと、その死後文化年間に、芭蕉の千余句を集大成した最初の全集、俳諧「一葉集（いちようしゅう）」がある。芭蕉が、旅の途中美

濃の山中で詠んだ「夏来ても たゞひとつ葉の 一葉哉」からとられているように、「一葉集」も、「千葉集」も、「木の葉」説の名称であるが、万葉集の影響が大きいことは言うまでもないだろう。

ところで、その「千葉集」、先に書いたように、現代の千葉にもあった。歌集や句集ではない、銘菓「千葉集（せんようしゅう）」である。命名したのは、千葉氏の第42代当主に当たる千葉滋胤氏とその仲間の皆さん。2007年、当時千葉市商工会議所会頭だった千葉氏は、「千葉ブランド銘菓創造委員会」を立ち上げ、その委員長だった。同委員会立ち上げのねらいを、仕掛け人の事務局長原田邦雄氏は、次のように話している。

「当時、千葉県でNPO観光立県支援フォーラムというプロジェクトをしていたのですが、観光で多くの方に来てもらっても、千葉のお土産になるような名物がないのです。北海道には『白い恋人』、広島には『もみじ饅頭』、その他京都の『京八つ橋』等々があるのに、千葉には土地のお土産になるようなものがないのです。そこで、当時商工会議所会頭だった千葉さんに相談して、県内の老舗菓子メーカーの方々に呼びかけて、千葉ブランド銘菓創造委員会を立ち上げ協議、検討を進めました。千葉の代名詞となるような銘菓を創り、より多くの人達に千葉の魅力を広め、地域の活性化につなげたいということで、2年近くかけて試作を繰り返しました。そして、問題のネーミングは、いろんな案を検討しましたが、千葉の地名を活かして、万葉集に倣って『千葉集（せんようしゅう）』という銘菓シリーズの名にして発売に至ったのです」。

千葉のいい素材と巧みな技を集めた、千葉を代表する銘菓「千葉集」は、かくして出来上がった。



ところで、私見だが、銘菓「千葉集」を作り上げた「千葉ブランド銘菓創造委員会」を発展させて、千葉の読み方を「ちば」から「せんよう」に替え、「千葉（せんよう）ブランド創造委員会」を新たに立ち上げたらどうだろう。この委員会は、千葉全体のイメージアップ戦略を企画立案し、「千葉（せんよう）ブランド」を、千葉のもの、くらし、文化のブランドとして新たなムーブメントを起こす。「千葉」という言葉の言霊で、古くて新しい文化を魂呼びいするのである。つまり「千葉（ちば）」と「千葉（せんよう）」という、ともにとても縁起のいい2つの呼称を、千代に八千代に千葉相伝するのである。

そして、千葉には、そのための絶好のキャラクターとなる人物がいる。その人を同委員会の名誉会長にしたらどうだろうか。その人の名は、「バーチャル家持」……万葉ファンタジスタでお馴染み大伴家持である。なぜ、家持か？実は家持は千葉と深い縁があったのである。宝亀 5（774）年、現在の千葉県知事に相当する上総国の国守に任命されていたのだ。家持 57 歳の時のことである。同時に左京大夫にも任命されていたので、上総守は兼任ということになり、都にいたままで現地には赴任しない、いわゆる「遥任」だったようだが、上総守に任ぜられたことは、公的な史書『続日本紀』に記録されていることから紛れもない事実なのである。



麻賀多神社

そこから生まれたのだろうか、家持に関わるある言い伝えが、千葉に残されている。

成田市台方に創設から約 1700 年とされる麻賀多（まかた）神社がある。社伝によると、4 世紀頃東征中の日本武尊がこの地を訪れ、杉の幹に鏡を懸け、伊勢の大神を遥拝したのが社の起源であるとされている。この由緒ある神社に、大伴家持が天皇の名代で参拝に訪れ、大鳥居を寄進したという言い伝えが残されているのだ。同神社の社前案内版の「由緒」や同ホームページには次のように紹介されている。

「往時勅使として大伴家持も参拝されております。また当社の西方 1km の印旛沼湖畔の鳥居河岸というところには大伴家持が寄進したという大鳥居（一の鳥居）が建っています」。

印旛沼畔に建つこの大鳥居は、以来 61 年ごとに立て替えられたが、現在は市の道路計画のため場所を移され石の鳥居に立て替わっている。「謎めいた神代文字で書かれた縁起」等、同神社に伝わる 850 件を超える古文書は現在成田市立図書館に移管され調査研究されているが、これまでのところ、「家持の参拝と大鳥居の寄進」についての記述は見つかっていない。では、この伝承の出所はどこか？図書館の関係者は、大正 2（1913）年発行の『印旛郡史』や大正 7 年発行の『千葉県史』等ではないかと示唆してくれた。

『印旛郡史』には、「延歴 2 年 9 月勅使大伴家持卿始めて建立せる所なりと云う。爾来 61 年毎に建替を定例とする」と記されている。ところが、その出典は明確ではなく、どうやらこの説は、あくまで言い伝えで、本当に家持が参拝に訪れたわけではないだろうとされている。そもそも、同神社の宮司自身も、「そうあってほしいとは思いますが、宮司としてはそのような伝承を引き継いでいないし、記録として確認したことはない」と言う。

確かに、家持が上総守に任命された時に、この日本武尊由来の由緒ある神社に参拝し、鳥居を寄進した可能性がなきにしもあらずと仮定することはできるが、国守に任命されたのが宝亀 5（774）年で、家持が参拝したとされる延暦 2（783）年とは 10 年近い開きがあり、やはり家持が参拝して寄進したという言い伝えは、あくまで言い伝えであり、歴史上あったわけではないと思わざるをえないのである。

ところが、しばし待たれよ！この延暦 2（783）年という年は、家持と千葉を結びつける接点とも言えなくもない、ある縁があるのだ。その前年の延暦元年、家持は陸奥国按察使（みちのくのあぜち）に任命されている。そして、家持は確かに陸奥国の多賀城に着任し、3 年後にその地で没することになるのだが、家持が、いつ多賀城に赴任したのかはこれまで不明とされている。

とすると、もしかしたら、この下総国の麻賀多神社に参拝したという延暦 2 年という年が、それを解く鍵にならないだろうか。この年、家持は天皇への奉勅と宣旨ができる位階、中納言に昇進している。そこで、この延暦 2 年に、多賀城に赴任するため、都から陸奥に下る途次、天皇の勅使として、この由緒ある麻賀多神社を訪れ、大和の国や陸奥国の平安を祈って大鳥居を寄進したということはあり得るのではなかろうか。

これまでは単なる伝説として語り伝えられて、実際家持が訪れたことはないだろうとされてきたが、家持が訪れたとされるこの年代から推測すると、事実に基づいた言い伝えである可能性も十分考えられるのである。繰り返すが、単なる言い伝えとして、その年を設定するとしたら、この家持伝説によりリアリティを持たせるため、家持が上総国守に任命された 774 年あたりとするのが順当であろう。それを、敢えて外して、それから 10 年後としているのである。その年を、たまたま家持が陸奥国按察使として中納言に任命された年に設定したのだとしたら、この言い伝えの原作者（？）は並々ならぬ知恵者ということができよう。

前述した通り、麻賀多神社に残されていた社伝、つまり 854 件もの膨大かつ「謎めいた」古文書類はすべて成田市立図書館に委託され、現在調査研究が進められているということだが、その他『印旛郡史』や『千葉県史』等の家持に関する記述の典拠、さらには 30 年前に発見されたが以来調査された形跡がない、山辺赤人を初代とする「山辺家系図」等についても、早急に歴史学者等の専門家に検証してほしいところである。ちなみに、「**謎めいた神代文字で書かれた麻賀多神社縁起**」の冒頭部分である。



これら千葉に残る万葉集に因んだ各種伝承は、「千葉（せんよう）は万葉なり」を示すものであり、「千葉（ちば）もまた万葉なり」の証でもあると言って過言ではないだろう。とはいえ、少し千葉に長居すぎたようだ。次回、万葉ファンタジアをはさんで、「万葉集ナウ」の旅を続けることにする

